

# インド研修・出会いの風光

——大谷大学第一研究室・短期仏教科研究室企画

第一回大谷大学 インド仏跡研修旅行報告——

吉 元 信 行

## はじめに

インド、それは大谷大学にとって特別の意味をもった国である。周知の如く、本学は仏教精神によって建学された大学である。したがって、インドの大地は、本学の構成員にとって、仏教学・真宗学の専攻者に限らず、それぞれのフィールドワークの国々とはまったく別の次元の存在となるといえる。その意味では、本学にとって仏教発祥の地インドは、祖国であるとも言えるであろう。

そのためか、従来、研究の目的にせよ、あるいは観光目的にせよ、本学の教職員や学生がインドを訪れることは、他の大学に比べて多かったように思う。とくに、仏

教学や真宗学専攻の教員が、毎年のように個人的に学生を引率していくという、インドへのツアーが生まれ、仏跡踏査やインド文化の研修が行われてきた。筆者も今回の旅行までに、都合五回ほど学生を引率して、仏跡踏査研修を行ってきた。そして、これまで、引率した教員それぞれが、異口同音にその成果の素晴らしさを報告し、また、学生たちも、インドとの出会いによって、彼らの価値観を変えるほどの感動を訴えている。

数年前から、引率した経験のある教員たちの間から、このような試みは、個人レベルで行うよりも、学科、あるいは大学が、一定の計画のもとに行っていけば、その教育効果もあがるであろうということが指摘されてきた。

そのような中で、昨年末のこと、ようやく機熟して、  
本学の建学の精神の啓蒙を主題として行われている講義  
「総合Ⅰ・Ⅱ」の担当者である真宗学・仏教学の教員た  
ちの間で、本学学生を対象としたインド研修旅行を実施  
することのコンセンサスが得られた。本来ならば、大学  
の主催となるべき性格のものであるが、実施は一年でも  
早く行うべきであるとの共通認識から、暫定的に、発議  
した教員たちの所属する第一研究室と短期仏教科研究  
室とが企画主体となって主催し、本年度より実施する  
ことになった。次に、研修旅行の実施に至るまでの経過に  
簡単にふれておきたい。

#### 一 研修旅行に向けて

本年はじめ、第一研究室と短期仏教科研究室の合同  
会議において、研究室主任、インド留学ならびに仏跡踏  
査経験者を中心にした実施委員会が結成され、具体的に  
準備にとりかかることになった。実施委員のメンバーは  
次の通りである。

委員長 小川一乗教授（現仏教学科主任・仏教学）、委  
員 長崎法潤教授（当時仏教学科主任・インド学）、小  
野蓮明教授（当時真宗学科主任・真宗学）、神戸和磨教

授（短期仏科主任・真宗学）、吉元信行助教授（仏教  
学）、延塚知道助教授（真宗学）、宮下晴輝専任講師（仏  
教学）。

この委員会において、研修旅行の実施計画および旅行  
会社の選定を行った。当初、参加学生二〇〇人を限度と  
して、具体的な計画を検討した結果、まず、インドとい  
う異文化を体験することと、本学学生にとっての眼目で  
ある仏跡踏査、およびインドの学生との親睦を深めると  
いう三つの主要な目的を設定し、今回のコースを決定し  
た。また、時期については、一月から二月にかけての乾  
期がもちろん適当であるが、日程的に引率教員の比較的  
とりやすい期間と旅行費用の割引率の高いことを考慮し  
て、雨期にかかるが八月下旬から九月上旬にかけての時  
期にすることになった。

旅行会社の選定については、大勢の学生を引率する  
ということから、事故発生の場合などの対応や責任体制の  
しっかりしている旅行会社で、インド旅行の経験を十分  
もち、過去に本学の教員の引率するツアーを取り扱った  
ことがあり、本研修の意図をよく理解してもらえる旅行  
会社として、JTB（日本交通公社）団体旅行と近畿日  
本ツーリストの二社を選定し、二班に分けて研修旅行を

実施することにした。

本年四月より、第一研究室と短期仏教科研究室所属の教員が中心になって、研修旅行への参加を全学的に呼びかけることになった。「谷大生ならインドへ行こう」というスローガンで、各教員は授業やゼミなどで研修旅行の趣旨を学生に訴えた。そのアピール文は次の如くである。

大谷大学は仏教精神によって建学されています。

その仏教の発祥地はインドです。今から二五〇〇年前に、インドに仏教が成立し、その後、仏教は世界の宗教として展開し、今日に至っています。その仏教の発祥地インドを訪れ、仏教の遺跡を見学することを主たる目的としているのが今回の研修旅行です。

今回は、仏陀釈尊が正覚を成し遂げられた地ブツダガヤー、最初の説法をされた初転法輪の地サールナート、無量寿経や観無量寿経などが説法された地ラージギル、三蔵法師玄奘が学んだナールンダー大跡を中心に見学します。併せて、インドの文化を直接に見聞するために、博物館や文化的遺産を見学したり、インドの仏教研究者（大学教授）の講演を聴いたり、インドの大学生との交歓会を開くことも

計画されています。

大谷大学の学生ならば、一度はインドに行きましよう。そして、日本にいては体験することのできない異文化に触れ、素晴らしい感動を共有しまししょう。

文学部第一研究室

短期大学部仏教科研究室

（研修旅行募集パンフレットより、固有名詞は筆者の表記に一部修正）

実施まで三ヵ月という短期間であつたにもかかわらず、大変な反響で、両班で合計一三〇名以上の志願者が集まつた。そして、当初の願い通り、別表の如く、真宗学・仏教学・短期仏教科だけでなく、他の学科からも予想以上の学生が賛同してくれたのである。特に、女子学生の参加が多かつたのは、大学研究室という公の主体の実施する旅行に保護者の側も信頼を寄せてくれたからである。参加者の内訳は次の如くである。

①参加人員（引率教職員・添乗員・ガイドを除く）

一班四八名（内 男子一八名、女子三〇名）

二班六九名（内 男子三四名、女子三五名）

②学年・学科別（一、二班合計）

学年	真宗学	佛教学	哲学	社会学	史学	文学	短期仏教科	短期国文科	修士課程*	博士課程**	OB	合計
1	二	六	一	一	〇	一	二	二	五	一		三一
2	三	六	一	三	二	一	〇	〇	一	〇		二七
3	三	七	一	二	三	二						二八
4	一〇	一四	一	二	〇	〇						二七
その他											四	四
計	一八	四三	四	八	五	四	二二	二	六	一	四	一一七

\* 真宗学専攻 四 仏教学専攻 二  
 \*\* 仏教学専攻 一  
 ※ 資料提供 宮下晴輝専任講師

このことに気をよくした我々は、大学側に援助等の積極的協力を要請した。大学としても、その意義をよく理解し、実施準備に要する費用や引率者の旅費援助等の資金援助をはじめ、各班に一名ずつの事務職員の派遣、旅

行期間を含めた前後の学生課・教務課職員の待機、文学部長を在京本部責任者とする緊急連絡網の設置、学長や学生部長をはじめとする大学当局の公私にわたる支援などを含めて、大学主催に準ずる扱いをしていた結果になった。学長はじめ、関係者各位に対して、深く感謝申し上げたい。

## 二 研修旅行実施の概要

研修旅行は、二班に別れ、一週間の間を開けて、一班は近畿日本ツーリスト京都河原町支店、二班はJTB団体旅行京都支店の主催によって行われた。各班の主要研修日程は次の如くである。

### ① 研修日程表（次頁以下）

### ② 引率者

#### 一班

引率 団長 小川一乗教授、吉元信行助教授、宮下晴輝専任講師、柏倉明裕特別研修員。

大学派遣 松原文孝学生課幹事。

#### 二班

引率 団長 長崎法潤教授、神戸和磨教授、延塚知道助教授、一楽真助手、木越康特別研修員。

大学派遣 阿部彰雄教務課主任。

一・二班共通事項					一 班		二 班				
4	3	2	1	日次	地 名	交通機関	摘 要	月 日	摘 要		
ベナレス着	着	カルカッタ発	カルカッタ着	成田発	カルカッタ	AI 309便	(カルカッタ泊)	8・24	インド博物館では、 肝心のボールフト・ コーナーが停電 夜行列車にてカメラ 盗難未遂事件	8・31	台風で成田空港はひ どい暴風雨
発	着	貸切バス	貸切バス	貸切バス	パトナ着発	夜行列車	大精舎参拝、尼連禅河見 学、ビハール平原の景色 を楽しみながら一路ベナ レスへ (ベナレス泊)	8・27		9・3	途中七時間の足止め を食う
					ナーランダ ラージギル ブッダガヤ	貸切バス	霊鷲山・王舎城牢獄跡、竹 林精舎、王舎城外壁見学 (ブッダガヤ泊)	8・26		9・2	

9	8	7	6	5
	デリー・ニュー デリー	アグラ発 デリー着	ベナレス発 アグラ着	ベナレス
	貸切バス	貸切バス	貸切バス IC497便	貸切バス
	純インド料理 昼食に「タンドリー」で フマユーン廟、ガンジ ー廟、レッドフォート見学 夜、団員親睦会…自 己紹介・感話等	ターシマハル、アグラ城 見学、ネルー大学学生と の交歓会…夜十二時頃ま で (デリー泊)	早朝ガンジス河沐浴見学 午前中自由行動 飛行機でアグラへ (アグラ泊)	迎仏塔、サールナート遺 跡、サールナート考古博 物館見学 各自市内見学(自由行動) (ベナレス泊)
9・1	8・31	8・30	8・29	8・28
発 A I 308 便にてデリー (機中泊)	ニューデリー国立博 物館見学、バザール でショッピング (ホテルで反省会) (デリー泊)	予定外のもう一泊 ガンジー記念館・ク トウプミナル見学	見学 悪天候のため飛行機 の出発が二時間遅れ	ハニラトマータ寺院
9・8	9・7	9・6	9・5	9・4
大阪・成田着	発 A I 308 便にてデリー (機中泊)	ニューデリー国立博 物館見学 A I 308 便にてデリー	ガンジス河・ガート で学生二名沐浴	深夜到着のため、午 前中休養
		ネルー大学生のほと んどが女子学生でサ リー姿にうっとり		

(1) 第一班では、出発予定のエア・インディア機が24時間遅れることになり、1日帰国が遅れることになった。このニュースを聞いた学生達、全員が大喝采。みんながインドの虜になっていた証拠。もちろん、1日分の滞在費は航空会社持ち。

(2) 第一班では、一度、バザールで買い物をしたというみんなのたつての願いで、バスは郊外のバザールに横付け、カレーや日用品、衣類、装飾品など、品物の豊富さと安さと一緒にびっくり、ここでようやく純インドの雰囲気味わった。ところが、買い物の夢中で、集合時間に二〇分も遅れた女子学生が一人、あわや行方不明と、これには一同肝を冷やしたことである。集合時間厳守は団体行動の鉄則、要注意。

(3) 第二班では、ブッダガヤへ出発してから約三〇分後、大渋滞に巻き込まれる。殺人事件に関わる村人の抗議行動が原因。我々も結果的にその抗議行動に加わったことになったようである。ただ、周りを散歩したり、昼寝したり、インドの人たちと歓談したり、思わぬ収穫もあった。ただ、ホテルに着いたのは、深夜2時、しかし、ホテルでは食事の用意をして、ちゃんと待ってくれていたのには感激。

(4) 第二班では、夕方出国のため、時間の都合で、博物館見学組と市内観光組に別れて行動。この点、一班の出国1日延期は、研修する側にとってはまことに好都合であった。

※ 本表の作成は、柏倉明裕(一班参加)・木越康(二班参加) 両特別研修員の協力によった。

### 三 異文化との出会い

インドとの出会いは、成田空港の飛行機の機内に入ったときから始まる。フライトは「エア・インディア」であり、サリーを身につけたスチュワデスの笑顔に充ちた挨拶に、ほとんどが初めての海外旅行となる学生諸君の目はもう輝いている。独特の香料の香りがして、ヒンディー語のアナウンスが入るともう機内は完全にインドである。筆者も初めてのインド旅行のときは、この異文

化との出会いの感激に酔いしれて、その印象があまりにも強烈であっただけに、あっという間に旅行が終わり、気がついたときにはもう日本に帰国していたことを思い出していた。

今回、第一班の引率と研修指導に当たったので、いくつかの気づいたことなどについて述べてみよう。

我々の飛行機は、インド第一の大都市カルカッタのダムダム空港に到着した。学生諸君はまず、出発の成田空港に比べてあまりに汚いこの空港に驚く。そして、入国

手続きの窓口で、役人と添乗員の間で人知れず高級ウイスキーやたばこが取り交わされているのにびっくりする。空港ロビーに出ると、瘦せて黒く目だけぎよろぎよろ

したインドの人たちが、何か手伝うことはないかと話しかけてくる。ちょっと荷物に触れただけで、もってあげたからチップをくれと言われ、途方にくれている女子学生。個人が団体を聞いて、個人ならタクシーに乗せようとするボン引きたち。今までならば、大勢の乞食が押し掛けてきたのだが、今回はインドの玄関で乞食の洗礼に会うことはなかったのは幸いと言うべきか、あるいは、期待外れと言うべきか。インドの経済状態は、少しづつでも好転しているのか、それとも取り締りがきびしくなったのか。

カルカッタの街は、イギリスの植民地時代に発展した都会であるだけに、インドの縮図とさえ言われる。西洋と東洋、現代と古代、科学と自然、高級自動車と人力車や牛車、大金持ちと難民や乞食、色と風貌の異なった様々な人種の人たちと、あらゆるものが混在した文明の坩堝ともいえるところである。

空港からホテルへの道筋で、道端でごろごろ寝ている路上生活者や物陰さえあればへばりつくように組み立て

られた難民のテントに目を凝らし、そして、目を見張るばかりの五つ星の超一流ホテルに着いて、ジープンや単パンにズックという出で立ちの自分たちの姿で入れるのかと本気で心配している学生。

カルカッタの市内観光でまず对象的なのは、大英帝国統治時代の華麗なビクトリア記念館と古来のインドの臭いの込められたカーリー寺院であろう。ビクトリア記念館前の緑一色の広大な庭を散策しながら、白いヨーロッパ風の建物を仰ぐと、まさにヨーロッパにいたのではないかという錯覚を覚える。そして、その足で三〇分もしないうちに、なんともいえない臭いのする貧民窟のようなどころに降り立つ。乞食たちが列をなして手を差し出している路地を歩いたところに有名なカーリー寺院がある。カーリー・ガートという宗教的聖地で、カルカッタという地名はこの聖地名の訛った呼称である。

この寺院には、シヴァ神の妃の一人で、黒い顔、裂けた赤い口から血の滴る舌を出し、男の生首を串刺しにした首飾りを身につけ、片手に剣、片手に男の生首をかざした残忍でグロテスクな女神が祭られている。大勢の信者が詰めかけ、狭い境内は芋の子を洗うようである。神殿の前には、生け贄の山羊の首をはねる断頭台があり、



そこにはねっとりとし生血がこびりつき、黒くなるほど蠅がたかり、烏や禿げ鷹がそれをじっと見つめている。この光景に何人かの女子学生が気分が悪くなったというのもうなずける。このカーリー女神は、ベンガル地方において最も人気のある女神というから不思議である。

カーリー寺院本殿の真裏には、サボテンのような異様な木を御神体とした小さい祠がある。ここにも大勢老若男女が押しかけて、寸部の隙間もないくらいである。その御神体には様々な色の願い事を書いたお札のようなものがぎっしりとぶら下がって、それぞれの信者たちが様々なお祈りをしている。おそらくインド古来よりあった樹神信仰の神であろうが、このようなところにいい知れぬインドの人々のエネルギーというものを肌で感ずる。しかし、よく考えてみると、これによく似た光景を最近の社寺の縁日、あるいは昔に田舎の秋祭などで見たような気がして、なにか異文化でないような気がしたのは筆者一人であらうか。

今から四年ほど前のこと、筆者は二〇人ほどの学生を引率して仏跡を訪れたことがある。そのときも、今回と同じブッダガヤーのトラベラーズ・ロッジに宿泊したのであるが、その夜のこと、ご多分に漏れず、停電になっ

た。そこで、ろうそくをつけようとしていたとき、ロッシの中庭の方から「キヤー」という女子学生の声が聞こえたので、スワッチー大事と外に飛び出してみた。するとどうだろう、男女の学生達がみんな中庭に出て、空を見上げていてではないか。思わず空を見ると、何と、満天がまさに宝石を散りばめたような星のカーテンである。スバルの星団の星の一つ一つまでが見える。広大な天の川が空を横切る。数え切れないなんていう形容さえてできないような星星であった。ちょうど新月であり、停電のため、周りはまったく明かりのない世界である。一時間ほどの停電時間が何と短かったことか。学生たちの中には涙さえ浮かべて感激している者もいる。帰国してから、このときの学生と会うと、その感動の思い出が語り草になる。筆者はそのときのインドで考えたことである。このような星の美しさを自分の幼い頃に田舎で見たような気がすると。ひょっとしたら、彼ら学生たちは、その両親や祖父母たちが幼いときに星を見て感激したそのことを、インドに来て体験しているのではないかと。

今回学生たちとインドに来て、筆者はこのような場面に何回も遭遇した。インドは貧しい、インドの子供たちは純真だ、その目がなんともきれいである、瘦せた足で

力いっぱいリキ車のペダルを踏む車夫、頭に自分の図体より大きい薪の束を乗せてひたすらに歩むサリーの女性、メイストリートの中の平然と寝そべる牛、牛車・リキ車・自動車、そして人間が一つの道の中でひしめき合っている、動物たちと人々の仲良く共存している様、雨期の道路は至るところがどぶになって、牛が気の赴くままに糞をし、その同じ路上で人が生活している。こういうインドの様々な姿に学生たちはいたく感動する。ある学生は、すっかりインドの虜になって、次のように述べている。

バスに群がる乞食たち、インドの路上生活者たち、街並、また、宗教、文化、見るべきもの、学ぶべきもの、感じることに、驚くことが一気に私の眼前に広がる。カルカッタに着いたときには、正直、何がなんだかわからず、ただ、目が点であった。おまけに水は飲めないし、知らぬまになっちゃってしまっている下痢！

「インド病」という言葉がある。私がインドで目の当たりにした「最低の世界」(我々日本がきれいで豊かで最高だと定義して)を見ながら、何か引かれるものがあった。知っても知っても知り尽くせない

深さがあるのだと思った。日本は便利を求めるうちに味気ない生活をしている。はたして我々は、心は豊かなのだろうか。インドは生き生きしていた。インドは怖かった。でも、面白かった。インドは最低だった。でも、最高だった。インドへは、またぎつと絶対に行きたい。

また別の学生は、ブッダガヤーの尼連禪河とベナレスのガートでの体験を次のように述べている。

尼連禪河で子供たちと少し遊びました。言葉は違いますが、子供のあのいい笑顔は忘れられません。

少し川岸を歩いていたのですが、足元では、バリバリという音がします。気にせずにあるいていたのです。よく見てみると、骨なのです。牛か犬の骨なのでしょう。それは何ものでもありません、人の骨だったのです。私はショックでした。今までこのような体験をしたことがなかったからです。(中略)

(ベナレスのガートで)ボートに乗っていると、川岸には煙が上がっています。空には禿げ鷹が飛んでいます。川岸では火葬が行われていたのです。インドの火葬とは、薪の上に死体を置いて、そのまま焼きます。私は、死体の足が焼けていく様子を実際見

てしまいました。私自身忘れて考えない死をインドの人はそのまま受け入れている強さに感動しました。しかし、こういう様相も、筆者の子供の頃にはごく普通に日本でも見られた光景ではなかったか。インドで感ずる異文化とは、案外我々の心の故郷ではなかったのか。日本人の多くがインドに感ずる魅力の秘密がこのようにところにもあるのではないかと思う。このようなことに気づき、さらに、インドの人々の素晴らしさに目を開いた次のような学生の感想文は、この研修旅行の成果をよく示してくれるものであろう。

まず、インドは、昔の日本のような状態だったこと、人力車などが走り、オートリキ車（三輪車）がタクシー代わりです。男の人たちは、午後二〜三時頃でも井戸端会議をしていて、そうかと思えば、大学生が学生運動をしています。貧しいけれども、あったかい、そんな目をしています。日本の子供のようにいい服は着ていないけれど、みんな外で動物たちと一緒に遊んでいます。なにか、もしかしたら、私たちが忘れてしまったものを持っている国なのかも知れません。（インド人の）ガイドさんが「私はインドが大好きです。もっともっといい国にしたい、

日本のみなさんも応援してください」と言われました。自分の国が大好きだと思ふこと、それが一番この人たちの輝いている要因なんだなあと実感しました。

#### 四 仏跡との出会い

今回の研修旅行で訪れることのできた仏跡はほんの一部にしか過ぎない。しかし、仏教の成立にとって最も重要な成道の地ブッダガヤー、初転法輪の地サールナート、ブッダが最も長く滞在した場所であるといわれる王舎城の諸遺跡、仏教学発祥の地ナーランダー大学跡など、ブッダの生涯並びに仏教の歴史における重要な聖地をこの足で踏むことができたことは、講義で、あるいは書物の上で仏教を学ぶこととはまったく違った意味を持っている。しかも、時間の都合で訪れることはできなかったけれども、アショーカ王の王宮跡とも、第三結集の行われた鷄園寺跡とも言われるクムラール遺跡の近くを通って、その雰囲気だけでも味わい、また、尼連禪河の岸からは、苦行の地「前正覚山」や「苦行林」あるいは、苦行を放棄したブッダに村娘が乳粥を捧げたとされる「スジャーター村」を目の当たりに望み、仏伝の物語に思

いを馳せたりすることができた。

この仏跡に感じた学生諸君の感情は様々であろう。中には、仏跡を自分が写る写真の背景にしか考えていないような学生もいた。あの王舎城の悲劇で有名な七重の牢獄跡の石積みの上に立って写真にポーズをとっていた学生が、牢獄跡の真ん中の芝生の上に坐って遙か靈鷲山を仰ぎ、何分間も黙想をしていたあるOB団員の姿を見て何を感じたであろうか。

筆者はこの学生を非難してはいくのではない。それはそれでいいと思う。ただ、この学生が大学に帰って、仏伝の講義を聞いたとき、あるいは、観無量寿経をひもといたとき、この聖地に立ったことのない学生とはまったく違った感動を覚えるに違いないと思う。仏跡はまさにそのような力を持っているのである。ある学生が次のように述べているのは、このことを示すものである。

教職をとるということもあって、ろくに自分自身の勉強もしないでインドに行って、少し恥ずかしく思いました。けど反対に、周りの人々にインドの写真を見せて説明しなければならなくなり、テレビ番組や一緒に行った仲間たちいろいろな教えてもらい、だんだん知っていくうちに自ら図書館へ行って本を

借りたり、大阪の国立民族学博物館へ行って、いろいろな展示物にふれ、なにかとても嬉しくなりました。

ブッダが晩年にいつもおられた靈鷲山の香室の前で、筆者が学生たちに感話として述べた筆録を記しておこう。拙い話であるが、臨場感だけでも味っていただけたらと思う。

ここが有名な王舎城（ラージャグリハ）にある靈鷲山という山の頂上です。靈鷲山とは、パーリ語で *Gijjhakūṭa*、サンスクリット語で *Gṛhrakūṭa* というふうに言いますが、ここが何故有名であるかという点、この下を見てもらいますと、あそこがちょうど昔のマガダ国の都王舎城の真ん中です。今は家一軒ありませんが、当時は大きな都であったんです。その王様が頻婆沙羅王で、その息子の阿闍世太子がクーデターを起こして、血腥い事件が起きた。それが有名な王舎城の悲劇です。その王舎城の悲劇の起こった頃、その頃ブッダは晩年であって、ブッダはこの山のまさにこの場所（香室）におられたのです。そして、ブッダはここに比丘たちを集めて説法をされたということになっています。下の方から続いて

いるあの道（ピンビサーラ＝ロード）を通過して、ここに、熱心な信者であった頻婆沙羅王がブッダの説法を聞きに来たし、また、最晩年には、後にブッダに教化された阿闍世王もやはり、ここに来たわけです。さらに、五世紀には法顯がここに来て、華香を供養し、灯火を燃して悲嘆したとされています。

ここに来た人は、ここに立っているんなことを感じると思います。たとえば、原始仏教を専攻してきた私だったら、Mahāparinibbānasutta がここで説かれた。最晩年にここを出発点として、最後の旅路に出られて、クシナガラで入滅されたという、そういうことを思い起こします。また、大乘仏教を専攻している人ならば、この場所で『観無量寿経』や『法華経』が説かれたわけです。要するに、釈尊がここに長いことおられたので、いろんな説法が残されたということになっています。

この場所に立って、色々な気持ちで、それぞれの感慨を込めて、先ほど一同でお経を申し上げたところであります。

## 五 友人・師弟の出会い

今回のインド研修旅行は、いろんな意味での人間の出会いの場であった。その中でも、特に学生諸君に強烈に印象に残った出会いは、インドのネルー大学学生たちとの出会いであろう。それは、一・二班とも、デリーの THE OBEROI ホテルにおいて開催された交歓会においてである。今回の研修旅行及びこの交歓会の意図について、一班の団長小川教授は八月三〇日夜、次のような交歓会の開会の挨拶をされたので、その筆録を掲載しておこう。

みなさんは、大谷大学でいろんな学問をしていますけれども、今回はインドという国を訪れました。私たち教員の方は、何回かこの国を訪れています。学生諸君はほとんど最初です。そして、いろんな思いを持ったのではないかと思います。

難しい話になると思いますけれども、日本という国は、近代化の先端を歩み、科学主義・合理主義の中で経済的繁栄を遂げてきました。その基本にあるところは、人と差別し、比べる心です。人より上にならば、下の人を蔑み、下にたてば、上の人を羨む

という比べる心、サンスクリットでは、*vikalpa*と申しますけれども、そういう人と比べる心で経済的成長を遂げてきました。しかし、それで本当の人間の幸せがつかめたでしょうか。大谷大学の学生諸君は、短い間ですけれども、インドに来て、もう一度人間にとって本当の幸せとは何かということを、漠然としてはいるけれども、考えざるを得ないカルチャー・ショックを受けたのではないかと思います。

はつきり申し上げて、カルカタに入り、パトナを通って、それからブッダガヤー、サールナート、ベナレス、そして、昨日はアグラ、今日はデリーと、こういう行程の中で、日本人の感覚として、まず最初に、インドには貧しい人がたくさんいるということとで、大変なショックを受けたことでしょう。そのほか、経済的繁栄の目でみたときに、中には、貧しいインドに生まれなくて、日本に生まれて良かったと思った人もいるでしょう。そして優越感を持った人もあったのではないかと思います。しかし、優越感とは、所詮比べる心でしかありません。比べる心では、決して人間の本当の幸せはつかめない、そういうことを多分どこかで感じているのではないかと信

じています。そういうことを感じることでできるセンスを持っているのが大谷大学の学生諸君ではないかと思えます。

人間がそれぞれの国の文化の中で精いっぱい生きていくということが、そして、それぞれの違った文化を精いっぱい育てていくということがより大事なことでありまして、世界中が一つの同じ文化になっってしまったら、固有の人間らしさが失われるだろうと思います。日本には、日本固有の文化があり、インドには、日本の倍以上の古い古い歴史を持った素晴らしい文化があります。それを単に経済的な面だけで、あるいは科学的な発展だけで、人間の幸せを決め込んでしまっている現在の状態は非常に特殊な状態であると思います。特に日本などにおいては、自然破壊であるとか、環境汚染であるとか、公害であるとか、人間が作り出したいろんな事柄によって人間が苦しんでいるという状況が現に生まれつつあります。

そういう人間が人間自身を減ぼしてしまいかねない現在のあり方に、私たちはストップをかけなければならぬと思います。そのためには、それぞれの

固有の文化を大事にして、そして精いっぱいその文化の中でお互いに生き合っていくところに、何かしら人間として手を取り合っていける世界があるのではないかと思えます。

特に、大谷大学の学生諸君は、今まで目で見てきた事柄と合わせて、今日は直接インドの若い学生諸君と言葉を交わす中で、お互いの心に感じたことを、問題点を、お互いに語り合っていただいたいと思えます。  
(文責 筆者)

この後、大学のOBで、小川教授の同級生である、インド大使館(日本文化センター所長)の菊池法純氏の「インドのモンスーンについて」という永年のインド・ネパール生活の経験に基づいた感銘深い講演があり、引き続き、同ホテルの中華レストランにて、交歓会が持たれた。

今まで見てきた貧しいインドの人たちとは違って変わって、素晴らしいスーツやサリを身に纏い、知的な目を輝かせて、日本語を上手に操るインドの学生たちに、本学学生諸君はまず目をみはり、ホテルへの到着が遅延したため、シャワーはおろか、着替えさえしてきていない我が姿に途方にくれていた。

しかし、次第にお互いの話は弾み、時間の経つのも忘

れて、深夜の一時頃のお開きの挨拶もかき消され、ついに一二時頃まで交歓会は続いた。二班の方でも同様であったという。下痢をして弱々しい顔をしていた学生たちも生き生きと目を輝かせてインドの学生と話し合っており、我々教員たちは、若い学生諸君の友情のエネルギーに今更ながら驚嘆したことである。

学生諸君は、相互に住所を交わし、今も文通をしている者もいるという。先日、ある女子学生が、インドの人から手紙がきましたと、嬉しそうに報告してくれて、この試みが本当に良かったと実感した。

二班の方では、インドの大学の教授との交流も持たれた。団長長崎教授のナランダー留学時代の学友で、現マガダ大学仏教学科主任教授アルツァ・トナルク氏に成道の地ブダガヤーでスピーチをしていただいたとき、何人かの学生の目から感激の涙が流れていたという。また、インド学生との交歓会には、ネルー大学のモトウワニ教授が感慨深いスピーチをしてくださったとのことである(長崎法潤「ブダダの声を聞く旅」大谷大学広報三―三参照)。

大谷大学の学生たち相互の出会いもまた、新鮮な意味をもたらしただようである。一班では、一日滞在の延びた

デリーの空港ホテルの一室で、有志による反省会がもたれた。その会の主催者である金森勝広君（文学部四回生）の挨拶の一部の筆録を記しておく。

皆様、お疲れさまでした。あと一日になりましたけれども、なんとかラッキートに、僕にとってもラッキードだったんですけど、一日延びて、宴会もできて（笑い）、良かったなあとと思います。それで、やはり、大谷大学にいても、本来なら知り合わなかったと思うんですけども、こういうきっかけで知り合えて、一班・二班に別れたけれども、前半の一班で知り合えて、仲良く楽しくできたのは、素晴らしい出会いだと思います。日本に行っても寂しいつき合いでなく、楽しいつき合いをしたいと思いますので、機会を持って集まりたいと思います。（中略）是非とも日本に帰っても会いましょう。それから、学園祭で、リムカを売っていきましょう（笑い）。そのときには是非参加をしてください。ありがとうございます（拍手）。

このような出会いは、我々大谷大学の教員たちにとっても、実に有意義なものであった。この頃、学内を歩いていると、学生から親しげに挨拶をされるが多くな

った。一緒にインドに行った学生たちである。大勢の学生であったので、なかなか全参加者の名前まで覚えられないが、少なくとも一日間は寝食をともし、同じ釜の飯を食った間柄である。しかも、同じ仏跡に立ち、何回か話を交わしたはずの学生である。中には、インドのホテルで、深夜二時頃まで涙ながらに友人関係や恋愛問題について語っていた学生。熟睡中の我々をたたき起こして、買ったばかりのサリーを着て見せにきてくれた女子学生。

インドは、我々にふだん大谷大学では出会えない大谷大学生と深いつながりを持たせてくれたように思う。

## 六 モンスーンとの出会い

筆者が今までインドを訪問したのは、いつも二月から三月上旬にかけての大地の赤茶けたからからに乾いた冬の乾期であった。ところが、今回の研修旅行は雨期の末期に行われた。その生き生きとした緑の大地は、筆者にとってまったく新しい体験であった。その感激は、筆者のようなものにはいくら筆を労しても表現できそうなので、若い感受性の豊かな女子学生の文章を少し引用してみよう。



九月初めのインドは雨期もおわりに近づく緑の大  
陸であった。雨期でない季節、つまり十月から明け  
て五月までの八ヶ月間はからからの乾燥大地である  
という。

けれど、私の見たインドは、至るところしっとり  
した、いや正確にはじっとりとなべばりつくような湿  
潤の世界であった。草や稲やトウモロコシが茂り、  
もう水浸しの洪水のようになっている水田さえあち  
こちにあり、牛が顔だけ出して泥水につかっていた  
(中略)。

けれど、私は、ナールンダ仏教大学遺跡のつべ  
んから周りを見渡した時、ええ、世界はほんとに美し  
いですね、と素直に思うことができた。インドで初  
めて高い場所から水田と森と草原と集落の点在する  
大地を眺めた時である。また、霊鷲山の頂上から樹  
木の生い茂るなだらかな高原を見晴らしたときもそ  
う思った(船戸浩子「インド雑感」大谷大学広報三一三)。

本当に我々の体験したインドの雨期は、日本の梅雨ど  
ころではない。一〇〇%に近い湿度で、まさにべっとり  
という感じである。滝のようなスクールはベントツ製の冷  
房バスにも窓の隙間や換気口から容赦なく入り込み、床

は水浸しである。国道沿いの水田も洪水で、湖のようにな  
っている。そのなかに電柱があり、水の中を自転車が  
走っている。ベナレスの空港で一班の我々は、このすざ  
まじいスクールに見舞われた。豪雨と雷鳴のため、飛行  
機の出発は二時間も遅れた上、途中寄港予定のカジュラ  
ホー空港をとばしてそのままデリーに直行した。

また、ベナレスのガンジス河のガートの様子は、のど  
かな乾期とはまったく一変していた。水は一〇メートル  
も増水して、沐浴する余地もないほどであった。舟の通  
る水の中に街灯が立って、手に取れるくらいの高さに電  
灯がついていた。激しい水流を遡るため、河岸から縄で  
舟を引く人がいる。乾期の静かな女性のようなガンジス  
河とこの恐ろしい濁流の対比、インドの人のこの河に抱  
く宗教感情というものの一端を垣間みたような気がした。  
パトナのガンジス河も同様であった。河の水は国道の  
そばまで迫っていた。ブッダ最後の旅の様を伝える  
『Mahāparinibbānasuttanta』では、ブッダがこのガン  
ジス河を渡られるとき、「そのとき、ガンジス河は水が  
満ちていて、鳥が飲めるほど岸までいっぱいであった」  
(D. II, p. 88) と説かれているが、まさにこのようであっ  
たのであろうと思うと感慨ひとしおであった。

先に触れたインド大使館の菊池先輩も、交歓会での講演において、「インドにおいては、このモンスーン期というのが最も大切な時期であります」ということを最初に述べられた。まさに乾ききった大地を生き返らせ、そして、生産と豊饒の恵みをもたらすのがモンスーンなのである。『スタタニパータ』にある次の一節は、まさにこのモンスーンを待ち望む農夫の心情であろう。

牛飼いだニヤが言った、「蚊も虻も存せず、牛どもは沼地に茂った草を食んで歩み、雨が降ってきても、彼らは堪え忍ぶであろう。だから、神よ、もし雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。」(St. 20)

## 七 反省と今後への展望

以上述べたように、今回のインド仏跡研修は、様々な出会いをもたらし、学生たちだけでなく、我々教員たちにも多くの感慨を残してくれた。学生諸君もデリーの空港で、日本に帰りたくない駄々をこねていたし、その後帰国してからも、インドの話をする目と輝かせている。そして、『大谷大学広報』などにも素晴らしい感想文を寄せてくれた。去る一〇月一七日(木)には、本学学内食堂において、第一・二班合同による盛大な反省会が

催され、様々な思い出話に花を咲かせたことである。また、先にふれた、デリーでの反省会で、金森君が提案していたように、本年の大谷大学学園祭では、インド研修旅行に行った者たち全員のコンセンサスが得られて、インドカレーとインドの産物のバザー、及びインド写真展が行われ、大成功裏に終わったことも記しておこう。

なお、本学学生部では、両班のインド研修旅行参加者に対する帰国後のアンケート調査を実施した。回収率は四四%に過ぎなかったが、この調査は、今後の研修旅行計画に貴重な資料となりそうなので、学生課の協力により、掲載しておこう。

### 1. 参加した動機についてお書きください。

主要回答事項…仏教を学びたい。友達に誘われて。インドに興味があった。ポスターを見て。異文化に触れるため。友達を作るため。

### 2. 研修内容について

①大変よかった31 ②よかった21 ③よくなかった0  
3. 研修で訪れた場所について

①大変よかった32 ②よかった20 ③よくなかった0  
①これで充分である18 ②他の仏跡(場所)も含めて

欲しかった 32

4. 日程の組み方について

① 大変よかった 11 ② よかった 30 ③ よくなかった 10

5. 出国手続きについて(説明会・パスポート申請から登乗まで)

問題は① なかった 34 ② 多少あった 2 ③ 多くあって

困った 0

6. 研修時期について

① 最適だった 17 ② 他の時期がよいと思う 8 ③ いつでもよい 10

7. 言葉について

問題は① なかった 8 ② 多少あった 25 ③ 多くあって

困った 4

8. 通貨・両替について

問題は① なかった 22 ② 多少あった 13 ③ 多くあって

困った 1

9. ホテルについて

① 大変よかった 17 ② よかった 17 ③ よくなかった 3

10. 食事について

① 大変よかった 7 ② よかった 24 ③ よくなかった 6

11. 乗り物関係について

① 大変よかった 13 ② よかった 37 ③ よくなかった 3

12. 買い物について

問題は① なかった 16 ② 多少あった 33 ③ 多く

困った 2

13. インドの大学生との交歓会について

① 大変よかった 27 ② よかった 21 ③ よくなかった 3

14. 病気について

旅行中 ① 異常なかった 9 ② 異常があった 42

帰国後 ① 異常なかった 24 ② 異常があった 28

15. 旅行費用について

① 適当と思う 33 ② 安いと思う 14 ③ 高いと思う 5

16. 身の危険性について

危険性を① 感じた 19 ② 感じなかった 33

17. 保護者の同意について

① 大いに賛成した 30 ② 心配しながら同意した 21

③ 内緒で参加 1

18. 今後このような研修旅行を継続することについて

① 大いに賛成 50 ② 積極的に賛成できない 2 ③ 反対

0

19. インド以外に研修を希望する国について聞かせてく

ださい

中国33 タイ14 ネパール10 チベット10 (自由に書かせて、主要なもの)

この調査結果からしても、今回の研修旅行は大成功であったと言えるであろう。その後、参加者たちの自発的発議によって、文集の作成が計画されていると聞く。

おそらく、彼らにとって、これから受けるであろう本学における仏教学や真宗学の講義が今までとは違った新鮮なものとなるであろう。しかも、本学にすることが、そのままブッダの国インドと直結していることに気がつくはずである。このような感動を一人でも多くの本学の構成員が共有し、新たな展望を期待するものである。

今回の研修旅行では、途中、下痢、風邪、喘息などの病人が発生し、さらに、帰国後、六人の赤痢患者が発見されるなど、思わぬ副産物を生みだした。これには、やはり、雨期という時期が問題であるのか。また、第一班では五〇人以上、第二班では七〇人以上という人数になり、現地で、二〜三台のバスを連ねて移動し、トイレ・ストップなどにも思わぬ時間を食い、小回りの効かない不便を何度も味わった。その意味で、人数とコースの問題があるのか。次年度の実施に向けて再検討を要するで

あろう。

ただ、今回の研修旅行は、準備期間も少なく、そのため、全学的なコンセンサスも不十分のまま、様々な問題を残したことも事実である。大学の全学生を対象にする以上、当然この旅行は大学の主催になるべきである。

その過渡期的措置として、今回は、第一研究室と短期仏教科研究室の共同企画で主催したが、こと何かの重大事故が発生した場合、やはり、大学側の道義的責任は問われるであろう。

そこで、大学の事務当局は、両班の研修旅行に当たって、事務職員を添乗させたり、夏休み中であるにも関わらず、連絡本部を設置して、昼夜を問わず待機していた。特に、両班とも帰国後、一三〇名余りの中から六名という小数ではあるが、赤痢患者が発生したために、その際は、文学部長が対策本部長として陣頭指揮にあたり、学生課・教務課職員の方々の尽力いただく結果となつてしまった。結果的に、両班全員の検便ということになり、保健所当局にも大変な迷惑をかけることになった。本学各研究室が全部こういう研修旅行を行うようになったらどういふことになるのかという危惧を現場の職員から聞いたが、それもあながちに思い過ごしとは言えない

であろう。

いずれにせよ、大谷大学総体として、建学の理念になうような海外研修旅行を実施することの必要性は当然のこととなる。そのことによって、建学の精神の高揚と本学における宗教教育の活性化に対する効果は計り知れないものがある。一日も早く、大学総体のコンセンサ

スが得られ、大学が主催する学生のための海外研修旅行制度の確立されることを切望する次第である。

(本稿は、平成三年度大谷大学真宗総合研究所共同研究「仏教学教育法の研究」による研究成果の一部である。なお、本稿作成に当たって小川一乗教授と長崎法潤教授に種々助言をいただいたこと、及び学生課にアンケート資料を参考にさせていただいたことを記して謝意にかえたい。)